いのちに根ざしたウェルビーイング啓発活動とその社会的インパクトに関する考察

林　歩実[1]・周　純甄[2]・葉　健人[3]・土井　健司[4]

[1]非会員　大阪大学大学院　工学研究科地球総合工学専攻（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-1）
E-mail: hayashi.ayumi@civil.eng.osaka-u.ac.jp (Corresponding Author)

[2]非会員　大阪大学大学院　工学研究科地球総合工学専攻（同上）
E-mail: chun.chen.chou@civil.eng.osaka-u.ac.jp

[3]正会員　大阪大学大学院助教授　工学研究科地球総合工学専攻（同上）
E-mail: yoh.kento@civil.eng.osaka-u.ac.jp

[4]正会員　大阪大学大学院教授　工学研究科地球総合工学専攻（同上）
E-mail: doi@civil.eng.osaka-u.ac.jp

人々が心身ともに健康で活力のある状態を実現するためには，継続的なウェルビーイング啓発が必要である．しかし，啓発活動はその性質上，収益を生み出すことが難しく，成果が分かりづらいため，活動を継続できない事例も散見される．継続的な啓発活動を行うためには，その成果を可視化する必要があるとして，本研究では，いのちに根ざした啓発活動を対象に，社会的インパクトを検証した．啓発活動の参加者にアンケート調査を行い，統計的手法を用いて分析を行った結果，セミナーへの参加による自己肯定感の向上が他者理解や共感，利他的動機に繋がり，参加者の意識や行動がイルビーイングな状態からウェルビーイングな状態へ転換するという社会的インパクトの発現構造が明らかとなった．

Key Words: *life, interventions, well-being, ill-being, social impact assessment*

1. はじめに

繰り返される大規模自然災害や新型コロナウイルス感染症の拡大，社会的不安の高まりに起因した自殺者の増加などが，我々に改めて「いのち」の大切さを実感させる機会を与えている．他方，住環境の改善や医療技術の進歩などにより長寿化が進む中で，人は長生きすればするほど病気や障害に苦しむ年数が増加することも明らかにされており [1]，いのちと共に日々のウェルビーイング(well-being)の改善が課題となっている．

このような状況のもと，近年では個人が身体的・精神的・社会的に満たされている状態を表すウェルビーイング [2]という概念が広がりを見せており，これの向上に取り組む自治体や企業が多くみられる．他方，イルビーイング(ill-being)という概念も同時に考慮することが必要と考えられる．イルビーイングは直訳すると繁栄や幸福，健康の欠如した状態となるが，ウェルビーイングの対になる概念として人や社会が抱える痛みや不自由，機能が損なわれた好ましくない在り方を表す．なお，イルビーイングはウェルビーイングの対義語ではあるが，心理学では両者を必ずしも対立概念としては扱わない [3]．**図-1**は，Well/Ill-Staying/Moving(WISM)モデルとも呼ばれるウェルビーイングとイルビーイングの構造モデルを示している [4]．このモデルは，人間には様々な理想や欲求，目標があるという考え方に基づいており，ポジティブ-ネガティブと安定-変化という 2 つの次元からなる．ウェル・ムービング(WELL-MOVING)は，目標の実現に向かって進んでいる状態で，ウェル・ステイング(WELL-STAYING)は目標を実現している状態継続を表す．一方，イル・ムービング(ILL-MOVING)は，目標の実現に対して何らかの脅威がある状態で，イル・ステイング(ILL-STAYING)は失敗などにより目標が失われた状態継続を表す．ウェルビーイングを実現するには，まずはイルビーイングを理解し，ウェルビーイング啓発を通してイル・ムービングやイル・ステイングの状態にある人々がウェル・ムービングの状態へ変容するよう促す必要があると考えられる．

しかし，一般に啓発活動は，一度の活動では成果が出

づらいため，継続的に活動することが求められるが，啓発活動はその性質上，収益を生み出すことが難しい．また，活動による成果が分かりづらい傾向にあるため，成果を顧み活動内容の改善に活かす事は困難であるほか，活動の継続に必要な資源調達が難しく継続不能に陥るといった事例も散見される．この状況を打破するために，啓発活動による成果を可視化し，検証することで活動内容の改善に繋げることに加え，社会あるいは出資者への説明責任を果たして，啓発活動に対する更なる理解や資源の獲得につなげることが必要である．

これを実現する仕組みとして，内閣府を中心に，事業や活動が生み出すアウトカムを把握し，事業および活動内容の改善や説明責任に繋げることを目的とした，社会的インパクト評価 [5]の推進が図られている．社会的インパクトとは，短期・長期の変化を含め，事業や活動の結果として生じた社会的，環境的なアウトカムのことを指す．社会的インパクト評価とは，社会的インパクトを定量的・定性的に把握し，当該事業や活動について価値判断を加えることである．なお，評価手順は図-2 の通りである．まず，計画(Plan)の段階では，活動が成果を上げるために必要な要素を体系的に示すロジックモデルを検討する．ロジックモデルは，期待するアウトプットからアウトカム，それに必要な活動・資源を整理したモデルである．そして，アウトプット・アウトカムの評価範囲や評価方法をステークホルダーとの合意を得ながら決定する．次に，実行(Do)の段階では，実際に活動を実施するとともに評価方法に基づいたデータの収集を行い，分析(Assess)の段階では，因果関係や課題の分析を行う．報告・活用(Report&Utilize)の段階では，分析結果を多様なステークホルダーへ報告・周知するほか，この結果を組織内部の意思決定へ活用する．これにより，活動を継続あるいは拡大するためのリソース（人・もの・金）や合意形成につなげる．以上の PDARU サイクルを継続的に回すことにより，活動の改善に加え，ステークホルダーや社会に訴求をしながら活動の持続可能性を高め，さらなるインパクトの発現を試みる．この一連の活動が社会的インパクト評価である．

この社会的インパクト評価は，人口減少や高齢化の進展による社会的課題の多様化するわが国において，ますまず重要なツールになり得る．特に，従来の行政中心の取り組みには限界があるため，民間の主体が公益活動の担い手として評価され，成長できる環境の整備に資すると期待される．

啓発活動や教育やスポーツ分野の施策等の成果を金銭的価値に換算することが難しい事業において社会的インパクトを明らかにした国内の既往研究として，平野ら [6]の地域公共交通を支える新たなモビリティであるグリーンスローモビリティ（以下，GSM）を対象に社会的効果を検証した研究がある．GSM の特性を踏まえ，他者との交流を中心とした生活質の向上および，その総和としてのまちづくりに対する効果を社会的効果として扱っており，GSM 導入による生活の変化等を調査し，GSM の社会的効果を定量的に検証している．また，平野ら [7]は公共交通の大幅な再編がなされた地域の住民に対して生活実感の変化を調査し， 公共交通による自立した外出が他者や地域との関わりに繋がり，さらに，住民のウェルビーイングの向上に繋がるという社会的インパクトの発現構造を明らかにしている．このように，定量的な成果の把握が難しい事業に対して社会的インパクト評価を実施した事例はわずかながらあるが，啓発活動を対象とした実施事例は乏しい．

そこで，本研究では，いのちに根ざしたウェルビーイング啓発活動を対象に調査を行い，啓発活動による意識・行動の変容や，イルビーイングからの解放およびウェルビーイング向上に資する生きづらさをはじめとした心の壁や束縛からの解放，社会における「いのち」の捉え方を検証する．そして，短期的なアウトカムの発現構造を明らかにし，啓発活動における社会的インパクト評

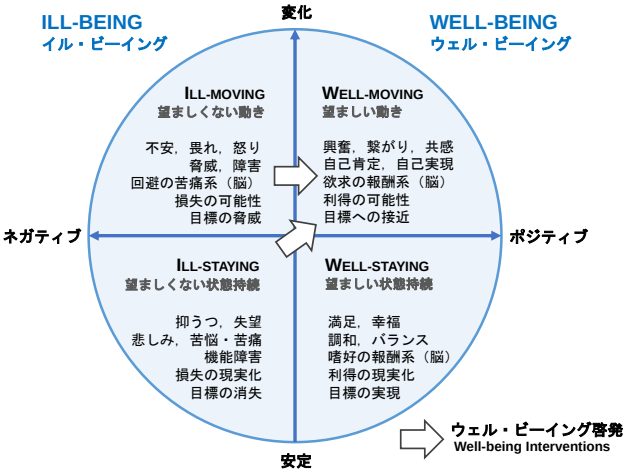


図-1　Well/Ill-Staying/Moving モデル [4]

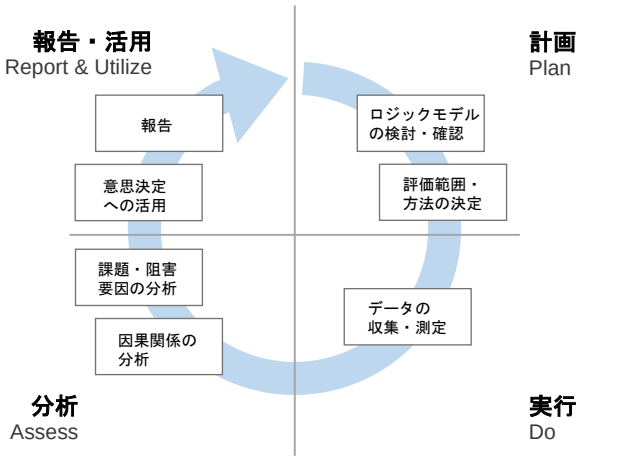


図-2　社会的インパクト評価の手順 [5]

価に関する考察を行うことを目的とする．これにより，ウェルビーイング啓発活動の必要性を示し，啓発活動の継続に繋げるとともに，成果を金銭的価値に換算することが難しい活動における社会的インパクト評価について考察することで，社会的インパクト評価の普及の一助になると考えられる．

2. 調査の概要

(1) 調査対象とする啓発活動

まず，土木計画学分野における啓発活動をみると，防災や減災に関する活動や交通ルールに関する知識の普及を目的とした活動が多くみられる．また，河川や海岸環境の維持に関する活動のほか，社会資本設備の必要性を説く活動，技術者の職業倫理の向上を目的とした活動や子ども向けの土木分野の普及教育をはじめとした人材育成に関する活動もある．このように，啓発活動の内容は多岐にわたり，大半の啓発活動が身体面からいのちを守ることを目的としている．

次に，ウェルビーイングやイルビーイングに関する啓発活動をみると，献血の呼びかけや応急手当の講習，食生活改善の普及など身体面から健康を守る啓発活動に加えて，人権保護・啓発に関する活動やストレスケアおよびうつ対策の普及をはじめとした精神面から健康を守る啓発もみられる．また，身体面と精神面の両方に影響を及ぼすグリーフをテーマとした啓発活動もわずかながらみられる．なお，グリーフとは，日本語では悲嘆と訳され，死別による悲嘆が続くほか，心身の不調を感じる状態を表す[8]．

本研究では，防災をはじめとした土木計画学分野の安全に関する啓発活動に加えて，あんしんやグリーフに重点を置いた啓発活動も実施している団体に着目し，その中でも「いのち」と向き合い，生きることの大切さや生きる喜びを探すセミナー（以下，セミナー）を調査対象とした．このセミナーは，イルビーイングな状態にある人々をウェルビーイングな状態にするため，意識や態度の変容を促すことを目的とした啓発活動であり，2012 年度から継続的に活動している．

(2) ロジックモデルの作成

本研究では，**図-2** の社会的インパクト評価の手順に従い，セミナーの主催団体の担当者と共同でロジックモデルを作成した．**表-1** に示す通り，人・物・経済および時間的な投入資源として，セミナーの企画および参加者の募集，セミナーの開催といった活動が位置づけられ，直接の結果として参加者数や開催回数が得られる．セミナーの開催目的を踏まえて，セミナーがもたらす社会的インパクトを「イルビーイングな状態からウェルビーイングな状態（意識・態度・行動）への転換」と定義し，成果は意識・態度の変容および行動の変容とした．また，セミナー参加者が非参加者に対してセミナーの内容等について共有することで，非参加者の価値観や意識・態度に影響を与える可能性があるため，セミナー内容等の共有を成果に加えた．

表-1 セミナーを対象としたロジックモデル

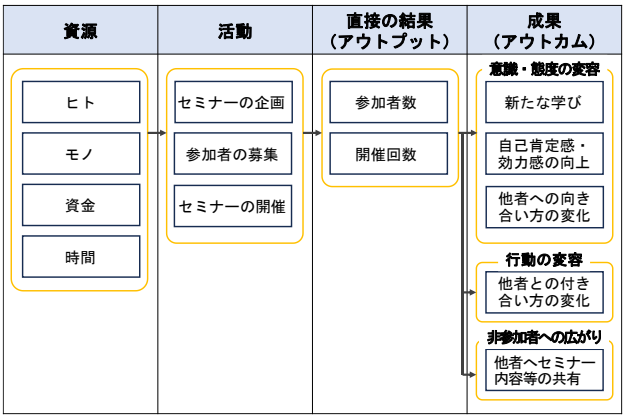


表-2 アンケート調査の概要

調査対象	これまでのセミナーへの参加者，およびセミナー配信に関する連絡先登録者
調査期間	2023 年 8 月 7 日～2023 年 8 月 21 日
調査方法	メールにて URL を配信し，Web 調査（Google Forms）を実施
調査結果	配信数：2950 件 回収件数：546 件 回収率：18.5%

表-3 アンケート調査の質問項目

個人属性	性別，年齢，職業
参加経験	参加回数，過去に参加したセミナー，参加動機
他者への共有	セミナーについて他者に共有した経験の有無，共有相手，共有内容
価値観や考え方	セミナーで得た学び，他者と関わる姿勢，セミナー参加により得た気づき，いのちやあんしんの捉え方
セミナー参加による変化	自身に関する考え方の変化，他者への向き合い方の変化，他者との付き合い方の変化

(3) 調査の概要

上述のロジックモデルに挙げた成果を把握するために，セミナーに参加経験がある方に対して web アンケート調査を行った．調査の概要を**表-2** に示す．また，調査の質問項目は**表-3** の通りで，個人属性（性別・年齢・職業）に加えて，ロジックモデル中の直接の結果として挙げた参加経験に関する質問項目，成果として挙げた意識・態

度・行動の変容およびセミナーについての他者へのセミナー内容の共有経験を尋ねる質問を用意した．また，心の壁や束縛からの解放および社会におけるいのちの捉え方を検証するために，回答者の価値観や考え方を尋ねる質問を用意した．

3. 調査の結果

(1) 回答者の概要

回収した 546 件のうち，有効回答数は 514 件であった．回答者の個人属性の分布を**図-3** に示す．男性が 55.4%を占めており，やや男性が多いものの，男女比に大きな差はなかった．年齢は，最も多い年代が 60 代で，36.4%を占めた．70 代以上は 30.4%であり，高齢の方の回答が多く得られた．職業は，無職および主婦（主夫），学生を合わせて 39.1%であり，就職している回答者は約 60%であった．

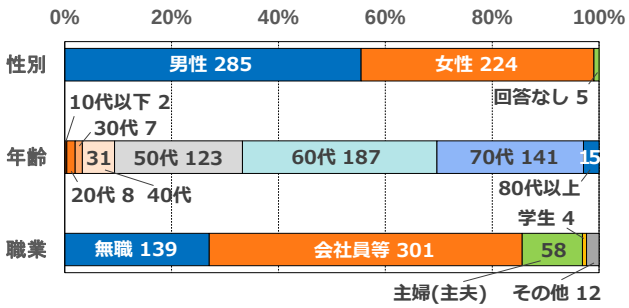


図-3 回答者の個人属性

(2) 集計結果

アンケート調査の単純集計の結果を以下に整理する．

a) セミナーへの参加経験

これまでのセミナーへの参加回数を尋ねたところ，「1 回」が最も多く 22.0%を占め，セミナーに複数回参加経験がある人は約 80%であった．さらに，「10 回以上」参加経験がある方は 15.0%いることが分かった．また，参加動機について 8 項目を提示し尋ねたところ，「講師に興味があった」を選択した人が最も多く，30.5%であった．「セミナーに興味があった」「過去にセミナーに参加した」を選択した人は合わせて 30%を超えており，参加者の約 1/3 は講師や演題に関わらず，セミナー自体が参加動機になっていると考えられる．

b) 他者への共有経験

回答者自身がセミナーについて他者に話した経験があるか尋ねた結果，64.9%の回答者が他者に「話した」と回答した．また，共有相手について 4 項目提示し，複数選択可で尋ねた結果，「家族」が最も多く，全体の 47.1%を占めた．共有内容について 4 項目提示し，複数選択可で尋ねた結果，「講演の内容」が最も多く全体の 51.8%を占めた．

c) 価値観や考え方

セミナーで得た学びの内容について 16 項目提示し，複数選択可で尋ねた結果を**図-4** に示す．「前向きな生き方」が最も多く，38.3%の回答者が選択した．次に，セミナーに参加することで，大切さに気づいた事柄について 12 項目提示し，複数選択可で尋ねた結果を**図-5** に示す．「安心して過ごせる居場所がある」が最も多く，65.2%の回答者が選択した．次いで「平凡だが安定した日々を過ごす」が多く，59.9%の回答者が選択した．最

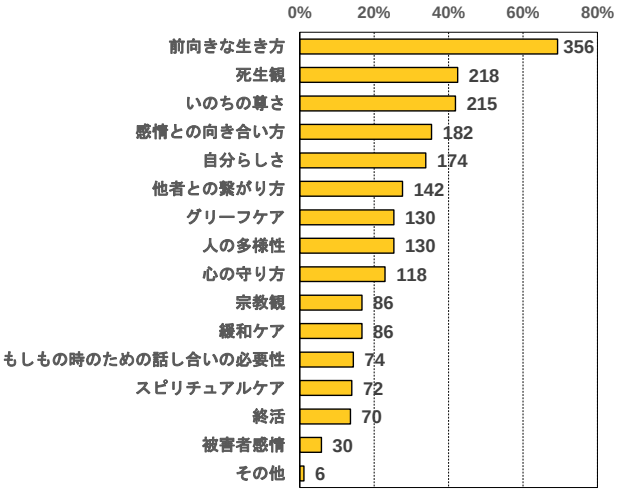


図-4 セミナーで得た学びの内容

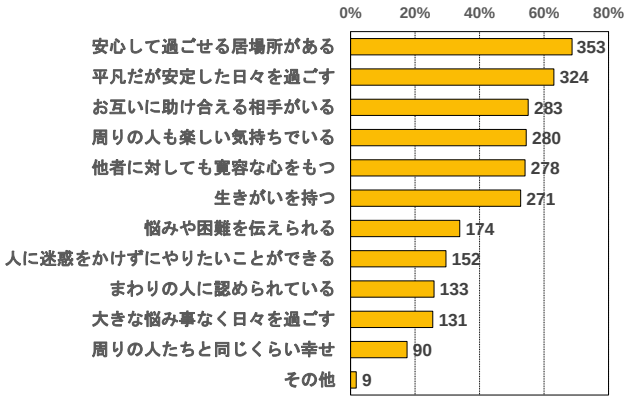


図-5 セミナーに参加することで大切さに気づいた事柄

後に，いのちやあんしんの捉え方について，**表-4** に示す 4 つの図からイメージに近いものを複数選択可で尋ねた．なお，「図ア」は様々なひとやいきもの「いのち」が在り，それらが不安や恐怖から解放された状態が「あんしん」であることを表す図であり，「図イ」は「いのち」はすべての中心に在り，それを守ることができる状態が「あんしん」であることを表す．「図ウ」は「いのち（を守る）」と「あんしん（社会）」は同じであり，からだ（いのち）とこころ（あんしん）は一体であることを表し，「図エ」は「いのち（を守る）」と「あんしん

（社会）」は相互に働きかけ合うことを表す．「図イ」を選択した人が最も多く 33.9%，次いで「図エ」を選択した人が多く 30.9%を占めた．

また，帰属意識ついて 5 件法で尋ねた結果を**図-6** に示す．「他者の気持ちも大事にしたい」の項目では，81.5%が「どちらかといえばそう思う」または「そう思う」と回答しており，大半の回答者が他者を尊重する姿勢を持っていることが分かった．

d) セミナーに参加よる変化

セミナーの参加前後での意識や行動の変化について 5 件法で尋ねた結果を**図-6** に示す．自己肯定感および自己効力感に関する項目については，全ての項目において「参加前の方がそう思っていた」「参加前後で大きくは変わらない」「わからない」の回答が半数以上を占め，最も回答者にポジティブな変容を与えた項目は「良いところも悪いところも含め自分」であった．

次に，他者理解に関する項目については，「他者の気持ちの理解に努める」の項目で半数以上が「参加後にその機会が増えた」「参加後に大きくその機会が増えた」と回答した．また，共感に関する項目である「思いやりの気持ちを持つ」「自らの経験を重ねて共感」においても半数以上の回答者が「参加後にその機会が増えた」「参加後に大きくその機会が増えた」と回答しており，セミナー参加後に他者への向き合い方が良い方向へ変化した人は半数以上いることが分かった．

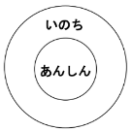
最後に，利他的動機に関する項目について，「頑張っている人の力になる」「痛みを抱えた人の力になる」「他者の先のことを考え行動する」の項目において，約半数が「参加後にその機会が増えた」「参加後に大きくその機会が増えた」と回答しており，セミナー参加後に他者への付き合い方が良い方向に変化した人も半数程度いることが分かった．

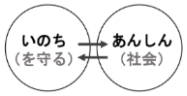
(3) 参加者の意識・行動変化と個人属性との関係

セミナー参加による意識変化と回答者の個人属性（性別・年齢・職業）との関連を確認するため，カイ二乗検定を行った．なお，個人属性について就業の有無に着目し，年齢は「60 代以下」と「70 代以上」，職業は「無職・主婦（主夫）」と「会社員等」にまとめた．また，性別について，「回答しない（n=5）」はサンプル数が少ないため除外した．さらに，自身に関する考え方の変化については，「参加後にそう思うようになった・参加後に強くそう思うようになった」を「効果あり」，「参加前の方がそう思っていた・参加前後で大きくは変わらない・わからない」を「効果なし」にまとめ，他者への付き合い方と向き合い方の変化についても同様に，「参加後にその機会が増えた・参加後に大きくその機会が増えた」を「効果あり」，「参加前の方がその機会が多かった・参加前後で大きくは変わらない・わからない」を「効果なし」にまとめて検定を行った．有意水準 5%のカイ二乗検定を行い，有意差があった項目の「効果あり」の割合を**表-5** および**表-6** に示す．

性別について有意差がある項目をみると，「大事な決

表-4 いのちやあんしんのイメージ

選択肢	ア	イ	ウ
			
選択人数	74 人	174 人	117 人
選択割合	14.4%	33.9%	22.8%

選択肢	エ	わからない
		
選択人数	159 人	31 人
選択割合	30.9%	6.0%

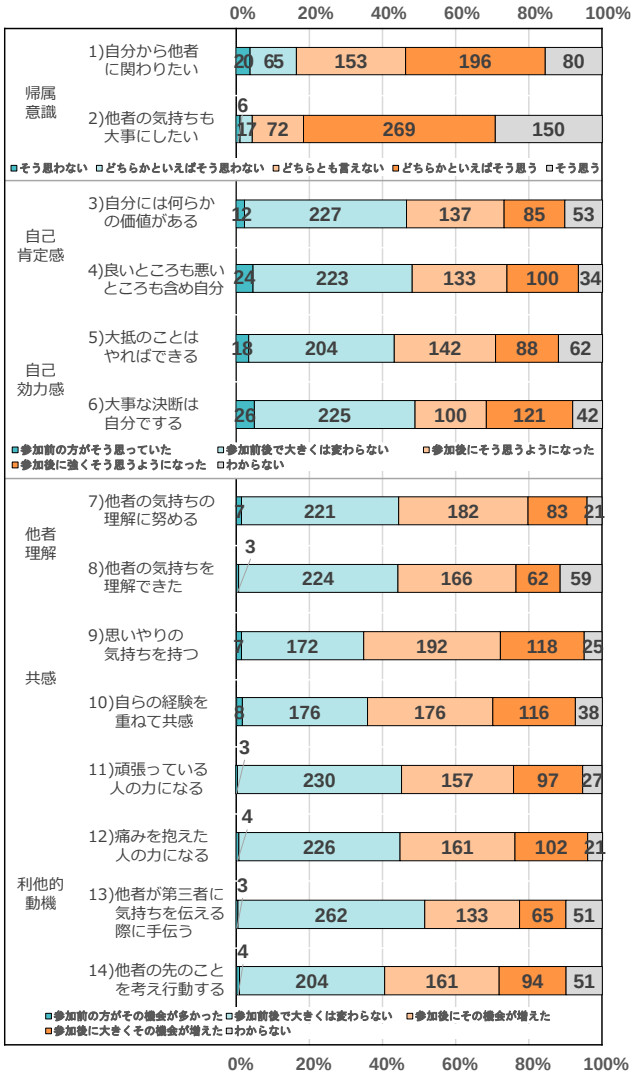


図-6 他者への態度およびセミナー参加による変化

断は自分でする」の項目においては，女性よりも男性の方がセミナー参加後にそう思うようになったことが分かった．職業について有意差がある項目をみると，すべての項目において「無職・主婦」のグループよりも「会社員等」のグループの方が，セミナー参加後にその機会が増えたことが分かった．なお，年齢はいずれの項目も有意差はなかった．

4. 社会的インパクトの発現構造

(1) ロジックモデルの検証プロセス

本研究では，社会的インパクトの評価で設定したロジックモデルを検証するために，まず因子分析を行い，その結果をもとに鍵となる構成概念（潜在変数）を措定し，潜在変数と観測変数との繋がりおよび潜在変数間の繋がりを共分散構造分析によってパラメータ同定し，社会的インパクトの発現構造を捉えた．

(2) 因子分析による潜在変数群の抽出

ここでは，ロジックモデルにおいて成果として挙げた，セミナー参加による自身に関する考え方の変化および他者との向き合い方の変化，他者との付き合い方の変化の設問に加えて，他者に関わる姿勢の設問を用いて，検証的因子分析を行った．他の設問は名義尺度であるため，分析に含めなかった．なお，探索的因子分析から抽出した因子をもとに分析を行った．結果を**表-7** に示す．χ^2=90.126，CFI=0.992，TLI=0.988，AGFI=0.936，RMSEA=0.037 であり，CFI，TLI は 0.95 以上，AGFI は 0.9 以上，RMSEA は 0.05 未満のため，あてはまりが良いと判断した．

表-5 性別と有意差があった項目の「効果あり」の割合

項目名 (%)	男性	女性	平均
6)大事な決断は自分でする	47.7	37.5	43.2

(3) 共分散構造分析による関係性の把握

次に，因子分析の結果を踏まえて 6 つの潜在変数を措定し，共分散構造分析を行った．なお，セミナー参加による変化を問う設問において，「わからない」の回答は，各項目の平均値を代入した．また，自己効力感の因子は自己肯定感以外の因子との関連性が弱いため，モデルから除外した．結果を**図-7** に示す．χ^2=291.107，CFI=0.960，TLI=0.951，AGFI=0.916，RMSEA=0.049 であり，CFI，TLI は 0.95 以上，AGFI は 0.9 以上，RMSEA は 0.05 未満のため，あてはまりが良いと判断した．この結果から，セミナーへの参加による自己肯定感の向上が帰属意識の向上や他者理解の促進に繋がり，他者理解が共感や

表-6 職業と有意差があった項目の「効果あり」の割合

項目名 (%)	無職・主婦	会社員等	平均
7)他者の気持ちの理解に努める	45.7	55.2	51.6
8)他者の気持ちを理解できた	38.1	48.3	44.4
9)思いやりの気持ちを持つ	54.8	63.7	60.3
10)自らの経験を重ねて共感	51.3	60.3	56.8
11)痛みを抱えた人の力になる	45.2	54.9	51.2
12)他者が第三者に気持ちを伝える際に手伝う	31.5	42.9	38.5
13)他者の先のことを考え行動する	41.1	54.9	49.6

表-7 因子分析の結果

因子名	項目	因子負荷量	標準誤差	Cronbach's α	CR	AVE
帰属意識	1)自分から他者に関わりたい	0.886	0.079	0.646	0.728	0.600
	2)他者の気持ちも大事にしたい	0.553	0.048			
自己肯定感	3)自分には何らかの価値がある	0.868	0.028	0.852	0.854	0.745
	4)良いところも悪いところも含め自分	0.859	0.031			
自己効力感	5)大抵のことはやればできる	0.764	0.031	0.766	0.772	0.631
	6)大事な決断は自分でする	0.818	0.035			
他者理解	7)他者の気持ちの理解に努める	0.860	0.028	0.803	0.810	0.682
	8)他者の気持ちを理解できた	0.783	0.027			
共感	9)思いやりの気持ちを持つ	0.889	0.028	0.866	0.866	0.764
	10)自らの経験を重ねて共感	0.859	0.029			
利他的動機	11)頑張っている人の力になる	0.879	0.027	0.913	0.916	0.733
	12)痛みを抱えた人の力になる	0.896	0.027			
	13)他者が第三者に気持ちを伝える際に手伝う	0.836	0.025			
	14)他者の先のことを考え行動する	0.803	0.028			

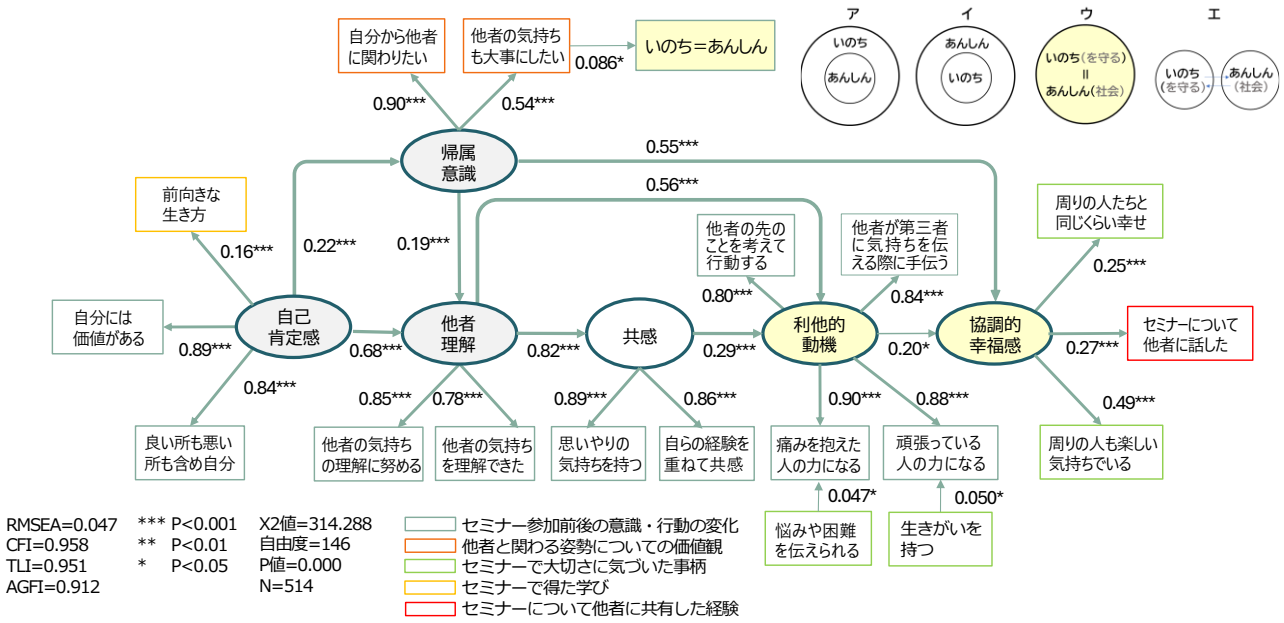


図-7　共分散構造分析の結果

利他的動機に繋がることが分かった．また，帰属意識と利他的動機が協調的幸福感に影響を与えることが分かった．さらに，セミナーで得た「前向きな生き方」についての学びと自己肯定感，「セミナーについて他者と話した」経験と協調的幸福感の間に因果関係があることや，他者の気持ちを大事にしようとする意識が，「いのち（を守る）」と「あんしん（社会）」は同じであると捉えることに繋がることが明らかとなった．

以上より，セミナーへの参加による自己肯定感の向上を起点に，イルビーイングな状態（意識）からウェルビーイングな状態（意識・態度・行動）へ転換するという社会的インパクトの発現構造が捉えられた．

5.　おわりに

本研究では，セミナー形式のいのちに根ざしたウェルビーイング啓発活動の社会的インパクトの評価を試みた．過去のセミナー参加者などに対し調査を行い，啓発活動による参加者の意識・行動の変容や，イルビーイングからの解放，社会における「いのち」の捉え方のセミナー参加後の変化を検証するとともに，短期的な社会的インパクトの発現構造を明らかにした．

まず，社会的インパクト評価の手順に従い，まずはセミナーのロジックモデルを作成し，セミナーがもたらす社会的インパクトを「イルビーイングな状態からウェルビーイングな状態（意識・態度・行動）への転換」と定義した上で，成果は意識・態度の変容および行動の変容とした．そして，この成果を把握するために，セミナーに参加経験がある方に対してアンケート調査を行った．調査の結果，回答者の 1/3 以上はセミナーで得た学びとして「前向きな生き方」を選択しており，**図-1** におけるウェル・ムービングの状態への促進に繋がったと考えられる．また，セミナーへの参加による変化について，他者理解や共感に関する項目において，50%以上の回答者が「参加後にその機会が増えた」「参加後に大きくその機会が増えた」と回答しており，他者への向き合い方が良い方向へ変化した人が半数以上いることが分かった．他者への手助けに関する項目においても，約 50%が「参加後にその機会が増えた」「参加後に大きくその機会が増えた」と回答しており，他者への付き合い方が良い方向に変化した人は半数いることが分かった．

次に，ロジックモデルを検証するために共分散構造分析を行い，セミナーへの参加による自己肯定感の向上が帰属意識の向上や他者理解の促進に繋がり，他者理解が共感や利他的動機に繋がることを確認した．これにより，自己肯定感の向上を起点に，イルビーイングな状態（意識）からウェルビーイングな状態（意識・態度・行動）へ転換するという社会的インパクトの発現構造が明らかとなった．

なお，本研究の試みは短期的な社会的インパクトの検証に留まっているため，追跡調査により効果の持続や継続的な活動による長期的な社会的インパクトの発現を検証する必要がある．また，社会的インパクト評価のプロセスにおける計画(Plan)，実行(Do)，分析(Assess)，報告(Report)までは達成できたが，活用(Utilize)の段階には踏み込めていない．啓発活動の実施主体とともに，セミナーの内容の改善など，研究結果を社会実践の中で活用す

ることが求められており，これは今後の課題として残されている．

REFERENCES

1) Murray, C., et al.: UK health performance: findings of the Global Burden of Disease Study 2010, THE LANCET, 381(9871), pp.997-1020, 2013.
2) 公益社団法人日本 WHO 協会：世界保健機関（WHO）憲章とは，https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/（2023 年 9 月 30 日閲覧）
3) 東京人権啓発企業連絡会：宇野 カオリ：レジリエンスで人生上々〜「イルビーイング」の只中にあっても「心理的に豊かな人生」を実現する術〜，https://www.jinken-net.com/close-up/20220801_3352.html（2023 年 10 月 7 日閲覧）
4) Røysamb, E. and Nes, R. B.: The Genetics of Well-being, Handbook of well-being. Salt Lake City, DEF Publishers, 2018.
5) 社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ：社会的インパクト評価の推進に向けて，https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/social-impact-hyouka-houkoku.pdf（2023 年 9 月 30 日閲覧）
6) 平野里奈，土井健司，葉健人，青木保親：グリーンスローモビリティの社会的価値の分析，IATSS Review，46 巻 3 号，pp.231-240，2022. [Hirano, R., Doi, K., Yoh, K. and Aoki, Y.: Analysis of Social Value of Green Slow Mobility, *IATTS Review*, Vol. 46, No.3, pp. 231-240, 2022.]
7) 平野里奈，土井健司，猪井博登，青木保親，山崎晴香：地域公共交通を対象とした社会的インパクト評価に関する研究―地方路線バス網の再編を対象に―，土木学会論文集，75 巻 6 号，pp. I_555-I_564，2020. [Hirano, R., Doi, K., Inoi, H., Aoki, Y. and Yamasaki, H.: A STUDY ON SOCIAL IMPACT ASSESSMENT OF LOCAL PUBLIC TRANSPORT POLICIES WITH FOCUS ON BUS NETWORK REDESIGN IN REGIONAL CITIES, *Transaction of the Japan Society of Civil Engineers*, Vol. 75, Issue 6, pp. I_555-I_564, 2020.]
8) 一般社団法人グリーフサポート研究所：グリーフとは…，https://www.griefsupport.or.jp/grief（2023 年 10 月 9 日閲覧）

A CONSIDERATION OF WELL-BEING INTERVENTIONS ROOTED IN LIFE AND ITS SOCIAL IMPACT

Ayumi HAYASHI, Chun-Chen CHOU, Kento YOH and Kenji DOI

Continuous well-being interventions is necessary for people to achieve a state of physical and mental health. However, it is difficult to understand the outcome of well-being interventions. For this reason, there are cases where activities cannot be continued. In order to conduct continuous well-being interventions, it is necessary to visualize the results. In this study, we examined the social impact of well-being interventions rooted in life. A questionnaire survey was conducted on the participants of the well-being interventions, and the results were analyzed using statistical methods. As a result, the structure of the social impact, in which the awareness and behavior of participants shifted from a state of ill-being to a state of well-being, was clarified.